



↑憧れのプロ選手のサインを求めボールやユニホームを手に並ぶ子どもたち。石谷選手はその全員に快く対応しました。

**子どもたちに夢を与える
プロ選手としての覚悟**

シーズンを終えた6月21日、忙しい日々の合間で帰郷した石谷選手は方城体育館を訪問。かつて在籍した「方城ミニバスケットボールクラブ」と「方城中学校バスケットボール部」の子どもたち約70人の歓声で迎えられました。約3時間の技術指導や試合形式の練習で子どもたちと汗を流した石谷選手。同僚の加納選手とともにプロならではのテクニックや連携を披露し、その度に体育館は驚きの声に包まれました。練習後も握手やサインを求める子どもたちに囲まれました。

**活躍続けた少年時代
迎えた競技人生の転機**

福智町伊方出身の石谷選手は、両親と2人の姉もバスケット選手と言う環境で育ち、幼い頃から常にボールが身近にある生活を送りました。小学生になり、父・敏行さんが指導するミニバスチームに加入して本格的に競技を始める。と、すぐにその才能が開花。努力家でもあった石谷選手は、周囲でも頭一つ抜けた選手となりました。そんな石谷選手が「競技人生の転機になった」と語るのが、中学2年生時の県代表選手への選抜でした。当時から有望な選手が多く「バスケット王国」と呼ばれていた福岡県。自ら点を取りに行くプレースタイルだった石谷選手は、

自分より背が高く、技術の高い選手とともに戦う中で、さらに上のレベルへ進むための方法を模索します。そしてバスやドリブルを中心とした周りを生かす、現在につながるプレースタイルを確立しました。またそのチームで全国優勝を経験したことは「自分の力が全国でも通用する」という自信にもつながりました。

高校進学時は力をつけ始めていた中村学園三陽高校に県代表時のチームメイトとともに進学することを選別。同校を初のインターハイ出場に導くなど、輝かしい実績を残しました。



↑中学時代、東京でのジュニアオールスターバスケットボール大会で全国制覇。「相手はもちろん、味方の技術に驚いた」と当時の印象を振り返る。

バスケットと育ちバスケットで生きる



↑身長196cmのチームメイト、加納誠也選手とともに帰郷し、子どもたちにプロの華麗なテクニックを披露。

**地元チームの誕生で
見つけた人生の目標**

以前から将来はバスケット競技に関わる仕事をしたと考えていた石谷選手は、高校卒業後、教員免許取得とハイレベルな環境を求めて強豪の福岡大学に進学。全国大会出場や九州大会の最優秀選手に選ばれる活躍を見せました。そして大学3年生時、地元福岡に現チームの前身「ライジング福岡」が



↑出場時間外もベンチから誰よりも大きな声で声援を送り、明るい人柄で信頼も厚い。(撮影:佐々木啓次)

誕生。「地元チームができたことで、プロがより身近で具体的な目標になった」と振り返ります。

大学卒業後、目標の実現に向けてライジング福岡の入団試験を受け、練習生として加入。プロのキャリアをスタートさせました。現在プロ10年目の石谷選手は青森に移籍した1年を除く9シーズンでライジングに在籍。明るい性格でムードメーカーでもあり、同僚の加納誠也選手も「あれほど優しく、誰からも好かれている選手はいない」と語る人柄で、年齢問わずチームやファンから慕われています。

最古参メンバーとして誰よりもチームを思う石谷選手にとって、B1リーグへの昇格は選手人生でも特に印象に残る、大きな喜びの節目となりました。

だが「自然豊かな風景や顔見知りやに会うと福智町らしさを感じる。やっぱり地元は落ち着きます」と笑顔で絶やさず応え続けました。

男子主将の永末冠太くん(中3)は「間近で見るプロの技はすごかった。自分も石谷選手のようなプレーができるようになりたい」と目を輝かせました。

地元、福岡県や福智町に愛情の強い石谷選手。「子どもたちに夢や目標を与える選手でありたい。『将来プロになりたい、ライジングに入りたい』と思わせるプレーができた」と思いを語りました。

「バスケットは好きと言うより生活の一部。生活全体がバスケットにつながっています」と白い歯をのぞかせた石谷選手。シーズンオフの今も毎日トレーニングを欠かさず、学校訪問などチームの広報活動にも積極的です。「来シーズンからはこれまでとはレベルの違う、さらに厳しい戦いになる。しかしあくまで高い目標を目指します」と力を込めました。

来シーズンから迎えるB1での戦い、新たな目標に向かう石谷選手の挑戦はこれからも続きます。

最高峰の舞台の頂点へ



撮影:佐々木啓次